

旅行記における事実と虚構

アレクサンドル・デュマ『旅の印象』をめぐって

石川 美子

19世紀初頭までのアルプス旅行

中世においては、高い山々は恐ろしい場所であった。ルネサンス期には、好奇心の強い作家や画家たちが高い山に登ることはあった¹が、一般の人たちが好んで山に出かけることはなかった。17世紀になると、イギリスの良家の子弟がグランドツアーに出かけるようになり、イタリアへ行くためにアルプスを越えねばならなかった。そのときに高い峰々の威容を目にして、はじめは嫌悪感や恐怖を感じ、やがては歓喜も感じるようになって、その感動を書きとめたりした。だがそれも、限られた階級の人たちだけの経験であり、多くの人がアルプス山岳地方の景観に興味をもつようになるのは18世紀後半になってからである。

その変化をもたらしたのは、1761年に出版された、ジャン＝ジャック・ルソーの小説『新エロイズ』であった。この身分違いの恋の物語は読者に感銘をあたえ、また、小説中で描写される山々の美しさは読者を魅きつけた。『新エロイズ』は、刊行の数か月後には早くも英訳が出されて、ヨーロッパじゅうでベストセラーとなった。そして多くの読者が、山の景色を見ようとスイスへ向かったのである。

おなじころ、フランスではジュネーヴの博物学者オラース＝ベネディクト・ド・ソシュールがシャモニーをおとずれて、ヨーロッパの最高峰モンブランに科学的な関心をもった。そして、モンブランへの登頂ルートを見つけ

¹ たとえばペトラルカは「有名な高山の頂を見てみたい」という気持ちから1336年に南フランスのヴェントゥー山(標高1912m)に登っている(Francesco Petrarca, *Epistole familiares*, Venetiis, Johannem et Gregorium de Gregoriis fratres, 1492, p. 49)。またレオナルド・ダ・ヴィンチは1511年にアルプスのモンボソ山に登って、万年雪を見たことなどを記している(『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(下)』杉浦明平訳、岩波文庫、1958年、p. 87)。なお「モンボソ山」が現在のどの山に該当するかは明らかになっていないが、「ボー山(標高2556m)」ではないかとも言われている(W. A. B. Coolidge et J. Simler, *Les Origines de l'Alpinisme*, Grenoble, Glénat, 1989, p. 295)。

た者には賞金を出し、登頂に成功しなかった者には日当を出す、と発表した²。モンブランは、当時は「呪われた山」と恐れられていたので、ただちに試みようとする者はいなかったが、最高峰の登頂をめぐる話題は人々の関心をひき、シャモニーの町をおとずれる観光客が増えていった。

スイス山岳地方やシャモニーにかんする著作も数多く刊行されるようになった。1773年にはマルク＝テオドル・ブーリが『サヴァワ公国の氷穴と氷河と氷塊の描写』を出版する。科学的な印象をあたえる書名であるにもかかわらず、人気の書となって、2年後には英訳が出され、再版もされた。ソシュール自身も、1775年から『アルプス紀行』全4巻をつぎつぎと刊行して、多くの読者を得た。ブーリは人気に応えるために、ときにはソシュールの文章を模倣し、ときには『新エロイーズ』の文章を大量に引用して、よく似た内容の本を量産していった。

このように1770年代から、『新エロイーズ』ゆえのスイス山岳地方への憧憬と、モンブランを見てみたいという好奇心とが混ざりあって、ルソーの愛読者たちがなぜかシャモニーへ赴くという奇妙な旅が流行するようになった。そのことを典型的に示しているのが、ゲーテの1779年のスイス旅行であろう。ゲーテは、バーゼルからベルンへ赴く途中に、ルソーが迫害から逃れて住んだサン＝ピエール島をたずねて、ルソーの苦難に涙し、ルソーの部屋の壁に自分の名を書きこんでいる。ベルンからローザンヌへ向かったときには、『新エロイーズ』の舞台であるヴヴェー村をおとずれて感動し、愛する女性に宛てた手紙のなかで次のように書いている。

わたしは涙を抑えられなかった […]。永遠の孤独者であるルソーが、繊細な人たちを住ませた場所のすべてが目の前に広がっていたのである³。

ところがジュネーヴに着くと、ゲーテはソシュールの家を訪問して、シャモニーに行くにあたっての助言をもとめている⁴。そしてシャモニーに着き、光り輝くモンブランを実際に目にしたときには、「その光景の美しさはこの

² ソシュール自身が『アルプス紀行』（1779、1786、1796年刊行）のなかでそのことを回想して書いている。Horace-Bénédict de Saussure, *Voyages dans les Alpes*, édité et présenté par Julie Boch, Genève, Georg, coll. « Le Voyage dans les Alpes », 2002, p. 187.

³ *Goethe en Suisse et dans les Alpes. Voyages de 1775, 1779 et 1997*, édité par Christine Chiado Rana, Genève, Georg, coll. « Le Voyage dans les Alpes », 2003, p. 9.

⁴ *Ibid.*, p. 63.

上なく希有なものであった⁵」と感嘆している。ゲーテは、ルソーとモンブランの両方に心を動かされて旅をしたのである。

それから20年以上がすぎた1805年に、シャトーブリアンがシャモニー谷に旅をする。そして翌年に『モンブラン紀行』を発表し、その冒頭で「ソシュール氏の著作によって有名になったシャモニー谷をおとずれた⁶」と書いている。ところが紀行文の後半になると、『新エロイーズ』の批判を長々と展開するのである。

高い場所が心身によい影響をあたえるなどと、ジャン=ジャック [ルソー] 自身、いったい本気で信じていたのだろうか。不幸な彼は、自分の情熱も苦悩も、スイスの山々の上には持って行かなかったのだろうか⁷。

シャトーブリアンは、シャモニー谷をおとずれて書いた『モンブラン紀行』のなかで、ルソーの「スイスの山々」のことを書いているのである。彼は『新エロイーズ』に批判的ではあったが、しかしルソーとソシュールを読んだことに動かされてシャモニー谷へ旅したことは確かである。

アルプスへ向かうユゴーとデュマ

スイス山岳地方とシャモニーにかんする本は、出版されるとかならず評判になり、よく売れた。それほどまでに人々は山岳地方に憧れ、自分もまたアルプスをおとずれてみたいと夢見ていたのである。1820年代になると、そのことを利用して、自分の名を高め、報酬を得たいと考える若い作家たちが登場するようになる。彼らは、ルソーやソシュールの著作に心魅かれてアルプスをおとずれるのではなく、山岳地方への旅が流行しているという事実のほうに目を向けて山に向かったのである。

そのひとりがヴィクトル・ユゴーだった。1825年にシャモニーに向かったとき、彼はまだ23歳であり、重要な作品を発表するには至っていなかった。『東方詩集』（1829年）も、戯曲『エルナニ』（1830年）も、『ノートルダム・ド・パリ』（1831年）も出していなかったが、3年前に結婚して子どもも生まれ、経済的な豊かさと文学的名声を得たいと望んでいた。そんなとき、

⁵ *Ibid.*, p. 68.

⁶ Chateaubriand, *Voyage au Mont-Blanc*, Rezé, Séquences, 1994, p. 23.

⁷ *Ibid.*, p.55.

20歳近くも年上の友人シャルル・ノディエから、8月に一緒にアルプスへ行かないかという誘いをうけたのである。

ノディエは、旅から帰ったらすぐに紀行文や詩を書いて、共著で出版しよう、と提案する。書名は『モンブランとシャモニー谷の挿絵入り詩的紀行』と決まり、ユゴーは4つのオードを書くということで、カネル都市出版社と契約を結び、本は12月中旬に出版される予定になった⁸。ユゴーは出発前に前金1750フランを受け取り、旅費の心配をせずに旅立つことができた。彼は父に書き送っている。

出版社が旅費を出してくれます。さらに、つまらない4つのオードのために2250フラン払ってくれるのです。いい原稿料です⁹。

しかし、「4つのオード」が書かれることはなかった。ユゴーは、高い峰々をはじめて目にしたときの感動を詩にすることができなかつたようである。多くの山岳紀行が書かれているなかで、詩人ユゴーの名を高めうるような特徴的な叙情詩を書くことはできなかった¹⁰。その結果、『モンブランとシャモニー谷の挿絵入り詩的紀行』の本が出版されることはなかったのである。

4年後になって、ユゴーはようやく「アルプス紀行の断章¹¹」という短いエッセーを『パリ評論』誌に発表する。だが出版社への義務のように書かれたテキストは、地名と比喻と形容詞を多用しただけの、読者の関心も共感もよびにくい文章であった。しかも「このような印象を、それを感じたことのない人にむかって描写しても無駄なことである¹²」とまで書いてしまった。結局、ユゴーはシャモニーをおとずれることによって報酬は得たが、文学的な名を上げることはできなかったのである。

ユゴーと同じ年に生まれたアレクサンドル・デュマは、ユゴーの旅から7年遅れた1832年にアルプス地方をおとずれている。戯曲『アンリ3世とその

⁸ こうした事情については、以下のものに詳述されている。Colette Cosnier, « Histoire d'un voyage », *Hugo et le Mont-Blanc*, Chamonix, Guérin, 2002, p. 69-73.

⁹ Victor Hugo, « Lettres, dossier biographique et carnets », dans *Œuvres complètes*, Paris, Club français du livre, t. I, 1967, p. 1503.

¹⁰ それから50年余りもすぎた1877年になって、ようやくユゴーはモンブランを詠った詩「山々（私利私欲）」を『新版 諸世紀の伝説』で発表した。「Les Montagnes. Désintéressement », *La Légende des siècles. Nouvelle série*, Paris, Calmann Lévy, t. II, 1877, p. 351-353.

¹¹ Victor Hugo, « Fragment du voyage aux Alpes », *Revue de Paris*, août 1829 (5^e volume, 5^e livraison).

¹² *Hugo et le Mont-Blanc*, *op. cit.*, p. 36-37.

宮廷』（1829年）や『アントニー』（1831年）の成功によって経済的に余裕ができ、劇作家としては有名になりつつあったが、まだ小説は手がけておらず、文学的名声を得るには至っていなかった。そんなころ、1832年にパリにコレラが蔓延して、デュマはコレラから逃れるためにアルプス地方を周遊する3か月の旅に出ることになった。デュマも当時の若い作家として、ただパリを離れて山岳地方を旅するだけでなく、アルプス旅行記を書いて報酬や名声を手に入れようと思いついた。ルソーにはほとんど関心はなかった。旅の途中で、ルソーの住んだサン＝ピエール島を訪れているが、それはルソーへの敬愛からではなく、サン＝ピエール島は旅行記でふれておいたほうが良い観光地だと考えたからであった¹³。

デュマは1832年7月21日にパリを発ってスイスへ向かった。そして8月17日にエクス＝レ＝バンから『両世界評論』誌の編集長フランソワ・ビュローズにあてて手紙を書き、旅行記を2巻本で出したいと提案する。

[...] 毎年、すくなくとも6月だけでも1000人から1800人がパリからスイスへ出かけています。スイスで見るべきものすべてを詩的に語るような挿絵入りの旅行本があれば、よく売れることでしょう。毎年、旅行の時期になるたびに、売り上げははね上がるでしょう。そういうわけで、わたしは出版権を売りたいはありません。1200冊ぶんの権利だけを売るつもりです¹⁴。

デュマの提案は受け入れられた。彼の旅行記は、まず『両世界評論』誌上で連載され、そのあと全2巻の単行本で出されることに決まった。

デュマのスイス紀行は、『旅の印象』と題されて、さっそく1833年初めから『両世界評論』で連載が始まった。まず、1-3月号で「夜の釣り」「熊のステーキ」「ジャック・バルマ」の3編が掲載され、4-6月号で「サン＝ベルナル山」、7-9月号で「エクスの温泉」「湖を巡って」の2編、10-12月号で「メール・ド・グラス」と、つぎつぎと発表されていった。この連載はおもしろいと評判になり、たくさんの読者を得た。一方で、事実ではないことが書かれているという批判や苦情も多く出された。

そのなかで、事件といってもよいほどの反響を生んだのが、連載の初回に掲載された「熊のステーキ」であった。デュマにとっても忘れがたいできご

¹³ サン＝ピエール島のルソーの部屋に入ったときも何の感慨もなく、当時のままに家具などが保存されているのを見て「[それはルソーへの] 尊敬よりもはるかに観光的計算によるものだ」と冷たく言っている。Alexandre Dumas, *Voyage en Suisse*, Paris, Hermann, 2005, p. 508.

¹⁴ *Ibid.*, p. 11.

ととなったらしく、のちに自伝『わが回想』（1852-1856年）のなかで数ページにわたって「熊のステーキの大真相」を書いている。さらに、自伝的小説『愛の冒険』（1862年）のなかでも言及しているし、遺作となった『料理大辞典』（1872年）においても、「熊」の項目を作ってこの話を持ちだして語っている。

『旅の印象』で描かれた事件

1832年9月末のある夕方、デュマはマルティニの馬車駅の宿に到着した。マルティニは、レマン湖とイタリア・アオスタ地方の中間に位置する町であり、当時は交通の要所であった。マルティニを経由してシャモニー谷に入る人も多かった。デュマも、マルティニを拠点としてシャモニーに往復しようと考えたのだった。

マルティニでデュマが泊まったのは、ナポレオンの皇后マリー・ルイーズも立ち寄ったという立派な宿であった。デュマが、今夜は宿で夕食をとりたいと言うと、宿の主人はささやいた。

「今日お着きになるとは、お客さまは運がいいですよ。まだ熊の肉がありませんから」。「えっ、ここの熊肉料理とやらは、おいしいのかね」と、肉料理にあまり心をひかれないわたしは言った。宿の主人は大きくうなずきながら微笑んだ。「うちの熊料理をいちど食べたら、ほかのものなど食べられませんよ」とでも言いたげだった¹⁵。

やがてデュマのテーブルに、熊のヒレ肉のステーキが運ばれてきた。デュマは食べるのを躊躇して、肉をなんども裏がえした。宿の主人にうながされて、ごく小さな一切れをとり、バターをたっぷりつけて、おそろおそろ口に入れた。熊肉とは思えないほど美味しかったので、デュマはひたすら食べつづけた。主人は傍らに立って、その肉はとても巨大な熊のものだと話した。

「だから、仕留めるのに苦労したのです」。「そうだろうな」。わたしは最後の一切れを口に入れた。「その熊は、自分を殺そうとした猟師の体の半分を食べてしまったのですから」。わたしは反射的に口のなかの一切れを吐き出し

¹⁵ Alexandre Dumas, « Impressions de voyages. II. Le Beefstake d'ours », *Revue des deux mondes*, mars 1833, p. 611 ; « Le Bifteck d'ours », *Voyage en Suisse*, op. cit., p. 70-71.

て、主人のほうに向いて言った。「なんてことだ。食事をしている人間に向かってそんな冗談を言うとは」。「冗談ではありません。ほんとうのことです¹⁶」。

宿の主人は説明を始めた。

マルティニの近くのフリー村にギヨーム・モナという貧しい農夫がいた。毎夜、梨畑から梨が盗まれるので、近所の子どものしわざだと思い、こらしめてやろうと待ち伏せた。すると闇のなかから急に1頭の熊が現れた。あまりにも近くにいたので、ギヨームは死んだふりをした。熊は梨の木に登り、実を食べ、やがて帰って行った。翌晩、ギヨームは銃を構えて待ち伏せた。熊がやって来て、木に登ろうとしたとき、彼は引き金をひいた。銃声と熊のうなり声が村じゅうに響きわたった。駆けつけた隣人のフランソワは、傷を負った熊がギヨームに突進して襲いかかるのを見た。恐ろしい叫び声があがった。フランソワも銃の引き金をひき、熊は倒れた。近づいてみると、ギヨームの体は熊に食い荒らされて、頭はほとんど食べられていた。村人たちが集まってきて、ギヨームのために涙し、残された未亡人のために寄付をすることになった。フランソワは熊の毛皮と肉を売り、その収益を未亡人に渡したのだった。

宿の主人は、デュマにも寄付をしてくれるように頼み、デュマは承諾した。この話が『両世界評論』に載ると、大きな驚きと関心をもって読まれ、評判になった。この文明化したヨーロッパにおいて、まだ熊を食べている地方があるという、マルティニにとってはありがたい評判でもあった。

それから2年近くが過ぎた1834年6月、ジョルジュ・アランダという男がマルティニにやってきた。アランダは、デュマの旅行記を読んで興味をもち、自分も熊のステーキを食べてみたいと思って来たのだった。だが、宿の主人にそう言っても、とりあわない。アランダが、「獵師を食べたのではない熊の肉をお願いしたいのですが」と言うと、主人は、「もうがまんができない」と怒鳴りはじめた。アランダがなおしつこく、「デュマが泊まったのがこの宿なら、あなたがデュマに熊のステーキを出したわけですね」と言うと、主人はいつそう興奮した。「あなたの言うアレクサンドル・デュマなんて人は知りませんよ。いいですか、全然知らない人なのです¹⁷」。そして、ギョー

¹⁶ *Revue des deux mondes*, art. cit., p. 615 ; *Voyage en Suisse*, op. cit., p. 73.

¹⁷ « Le Beefteach d'ours et la truite d'Alexandre Dumas, réclamation du maître de la Grande-Maison à Martigny, au sujet des *Impressions de voyages* », *La Revue du Lyonnais*, 1^{re} série, n° 1, 1835, p. 212-213.

ム・モナも、梨畑も、巨大な熊も、隣人のフランソワも、ギョームの未亡人も、寄付の話も、すべてが嘘だと言った。そもそも宿の主人である自分がレストランで給仕などするわけがない、誇りを傷つけられた、と大いに嘆き怒った。かたわらにいた山岳ガイドも、フーリ村で人が熊に殺されたことなど、かつてないと証言した。

アランダは、宿の主人の言うことを信じるしかなかった。しかたなく普通の夕食をとって、宿を出ようとしたとき、主人が真剣な顔で1枚の紙を差し出した。それは宣言文だった。

わたくしは、アレクサンドル・デュマ氏が『旅の印象』のなかで語ったこと、すなわちヴァレ州フーリ村での例の熊狩りの件とそれにまつわる事柄すべては偽りの塊であると明言いたします。わたくしは、デュマに給仕させていただいたことなど全くありませんし、ましてや熊狩りの話などしておりません。昔から、フーリ村で熊を殺したことなど全くありません。 […] ¹⁸。

アランダは、この宣言文をフランスの雑誌に掲載すると約束した。ただし、あまり効果はないであろうが、とも言い足した。「熊のステーキ」の話はたいへんおもしろがられており、フランスではおもしろいことこそが重要なのだ、と言った。宿の主人は、これは自分の誇りの問題である、と答えた。

翌年の1月、この宣言文はアランダの手によって『リヨン評論』誌に掲載された。リヨン地方の知識人向けの雑誌であった。アランダの文章は冗長で読みにくく、しかも小説仕立ての旅行エッセーになっており、そのなかに宣言文を挿入したので、信憑性も薄まってしまった¹⁹。宣言文が読者の関心をひくことはなかった。そして、その同じ年のうちに、パリでは『旅の印象』全2巻が大々的に出版されたのだった。「熊のステーキ」は『両世界評論』誌で発表されたときと全く同じ文章のまま第1巻に収められた。

『わが回想』から『料理大辞典』まで

1842年の夏、デュマはフィレンツェに滞在していた。フランス国王の第一王子のオルレアン公が急死したという知らせを受け、葬儀に参列するために

¹⁸ *Ibid.*, p. 226.

¹⁹ アランダのエッセーは、全文35ページにもおよび、宿の主人の説明が長すぎたり、本筋に関係のない人物が何人も登場したり、ほかの話題に移ったりと、読みにくいものであった。*Ibid.*, p. 200-234.

ただちにパリに向かった。帰路の途中、ジェノヴァでひとりの友人に遭遇し、一緒にパリに帰ることになった。シンプロン峠を越え、ヴァレ地方を進み、マルティニの馬車駅で休憩することになる。10年前とおなじ宿である。そのときのことをデュマは自伝『わが回想』（1852-56年）のなかで「熊のステーキの大真相」として詳しく語っている。

デュマは名前を隠して宿に入った。主人は気づかない。デュマは同行の友人に説明した。宿の主人はわたしのことを死ぬほど恨んでいるので、わたしの名前を言ったり、熊のステーキの話をしたりすると、たいへんなことになるだろう、と。すると事情のよくわからない友人は、主人に向かって、熊のステーキはありますか、と言ってしまった。そのときの主人の反応について、デュマはつぎのように書いている。

わたしは今まで、人の顔がひきつるのを何度も見てきた。[...] だがマルティニの馬車宿の不幸な主人と同じほどに人の顔が歪みひきつるのを見たことはなかった。主人は髪の毛を両手でかきむしって叫んだ。「ああ、またか、いつもこうだ…。同じ冗談を言わない旅人はひとりもないのか?」。友人は言った。「もちろん、アレクサンドル・デュマ氏の『旅の印象』で読んだのですが…」。[...] 「ああ、アレクサンドル・デュマか!」。不幸な主人は怒りで興奮し、続けて言った。「やつにこの目で会う日は来ないのだろうか? 決着をつけるには、わたしがパリに行かねばならないのか? やつはスイスには来ないのか? 来られないだろうな! 絞め殺してやろうとわたしが待ち構えていると知っているからな²⁰」。

宿の主人は半狂乱になって、奥の部屋に引っ込んでしまった。啞然とする友人に、デュマは説明した。『旅の印象』はたくさんの人に読まれ、本は何度も増刷された。好奇心のつよいフランス人やイギリス人がこの宿にやって来ては「熊のステーキ」を注文し、ここの主人を困らせたのだ、と。そのあとにデュマはつけ加えて言った。

これがフランス人の宿主であれば、この好機を逃さなかつたらうにね。「馬車駅ホテル」ではなく「熊のステーキのホテル」と看板を替えたことだろう。そして近隣の山じゅうの熊肉を買い占めたことだろう。熊肉が足りないときは、牛でも猪でも馬でも出して、わけのわからないソースで味つけをしておけばよかったのだ。そうすれば3年で大金持ちになっていただろう。そのあと、宿を10万フランで売却して、わたしの名を称えながら隠居していただろうに。いず

²⁰ Alexandre Dumas, « Grands éclaircissements sur le bifteck d'ours », *Mes Mémoires*, Paris, Robert Laffont, coll. « Bouquins », 1989, p. 860.

れにせよ、ここの主人は儲けはしたのだからね。ただし、たえず怒っているものだから、徐々に健康を害している。わたしの名を呪いながらね²¹。

まだ納得のできない友人はたずねた。

「それにしても、この熊の話のなかで何が事実なんだい。「すべてが事実で、なにも事実ではない、ということだよ」。「どういうことだ」。「わたしがここに来る 3 日前に、ひとりの男が熊を待ち伏せして撃ち、致命傷をあたえた。ところが熊は死ぬ前に男を殺して、頭の一部を食べてしまった。その事件をわたしは劇作家としてすこし演出して書いた。それがすべてだよ²²」。

男が熊に食べられたことは事実だが、この宿で熊のステーキを食べたというのは「演出」だったと、デュマは認めたのである。それが「大真相」である、と。だが、デュマがマルティニに来る 3 日前に人が熊に食べられる事件があったという話は、アラングが発表した宿の主人の宣言文とは大きく食い違っている。そもそも、デュマと友人がマルティニの宿でこのような会話をしたということさえ事実かどうかわからない。自伝のなかにかかれてのことだから、これもまた「演出」かもしれない。いずれにせよ、「熊のステーキのホテル」という看板をかければよかったのに、という思いつきだけはデュマの頭にずっと残ることになった。

このできごとから 20 年近くが過ぎたとき、デュマは『愛の冒険』という小説を発表した。1859 年 10 月から 1860 年 1 月にかけて『モンテ＝クリスト』誌に連載され²³、単行本としては 1862 年に出版された。デュマという主人公が昔の恋愛と旅を語るという自伝的小説である。旅の途中でリエージュを通ることがあり、そのとき、『旅の印象』のせいでリエージュの人に恨まれていると話す。そして「もうひとりの敵」のこともふれる。「マルティニの馬車駅の宿の主人」のことであり、「わたしに感謝すべき」なのに「恨んでいる」のだと語る。

それは、マルティニの馬車駅の宿の主人で、1832 年にあの有名な熊のステーキをわたしに出してくれた人だ [...]。フランス人の宿主であったなら、あれ

²¹ *Ibid.*, p. 863.

²² *Ibid.*, p. 864.

²³ *Le Monte-Cristo. Journal hebdomadaire de romans, d'histoire, de voyage et de poésie*, du 13 octobre 1859 au 12 janvier 1860. 『モンテ＝クリスト』誌は、1857 年から 1862 年にかけてデュマが発行していた雑誌であり、デュマの未刊作品を発表するものであった。1862 年の 10 月 10 月号を最後に休刊された。

ほどもごとに功を奏した宣伝文に大金を払いさえしただろうに。そして「熊のステーキの宿」という看板を出して、大儲けをしていただろうに。もっとも、そんなことをしなくても儲けたようではあるが。1832年のあと、わたしは再びマルティニの馬車駅に寄ったことがあった。宿の主人は、わたしの馬車の馬を替えるのに忙しくて、わたしには気づかなかった。もし気づいていたら、どうなっていたことや²⁴。

看板のことと、宿の主人がデュマに気づかなかったことについては、『わが回想』のなかで書いているのと同じであるが、同行した友人に「すこし演出して書いた」と打ち明けたことは忘れてしまったのか、主人は「熊のステーキをわたしに出してくれた人だ」と書いて、デュマが熊のステーキを食べたのは事実だということになっている。小説のなかだから、再び「演出」して書いたのだろうか。

最晩年の1870年に、デュマは『料理大辞典』を書く。大食漢で食通だったデュマが最後に書いたのは料理についての本だった。死の数か月前に書き終えたが、生前には発表されずに、刊行は死後の1872年になってであった。「辞典」の名のとおり、食材や料理の名をアルファベット順にならべて説明するという構成になっており、本文だけでも1000ページ以上におよんでいる。

「O」の項目を見ると、「œuf」に始まって、「ours」もあげられている。あたかも「熊」が普通の食材であるかのように。その「熊」の項目は、次のように始められる。

わたしたちの世代の者でも、『旅の印象』が最初に発表されたときに生じた影響を覚えているような人はほとんどいない。「熊のステーキ」と題された記事が（『両世界評論』か『バリ評論』で）読まれたときに生じた影響のことだ。文明化されたヨーロッパにおいて熊を食べている地方がある、と大胆にも語った人間にたいして、大いなる非難がなされたのだ。[...] 本は反響を呼んだ。わたしは文学活動の道に入った時期だったので、それこそがわたしの求めていることだったのであるが²⁵。

デュマは、熊の肉を食べることは自分の体験であったのみならず、マルティニ地方の風習であると言わんばかりである。また、自分が『旅の印象』に

²⁴ Alexandre Dumas, *Une aventure d'amour*, Paris, Calmann Lévy, 1888, p. 56-57.

²⁵ Alexandre Dumas, *Le Grand Dictionnaire de cuisine*, Paris, Alphonse Lemerre, 1873, p. 785.

よって文学的に名を上げようと望んでいたことも率直に語っている。そして続けて言う。

わたしが大いに驚いたのは、本が反響を呼んだことをもっとも喜ぶはずのマルティニの宿の主人が怒り狂ったことである。彼はわたしを非難する手紙をよこしたのだ。新聞雑誌にも、自分は客に熊肉を出したことなど一度もない、という署名入りの宣言文を送って、載せるように言った。だが、宿にやって来る客の全員がまずはじめに「熊肉はありますか」とたずねるものだから、彼の怒りは増すばかりだった。もしこの愚か者が「ありますよ」と答えて、熊のかわりにロバか馬かラバの肉でも食べさせるという頭があったなら、大金を儲けていたところなのだが²⁶。

死の数か月前になっても、デュマは「熊のステーキ」を忘れられないでいる。その話が虚構であったかどうかなどは、もはや関心がないようだ。せつかく自分があたえた好機を宿の主人が利用しなかったことへの悔しさだけが残っているのであろう。悔しさのあまり、主人を「愚か者」とまで呼んでいる。デュマはいかなる逆境も利用する強靱な精神の持ち主であり、パリのペストから逃れるために旅に出たことを利用して、旅行記を書き、報酬と名声を得ようとしたほどの人である。デュマの思惑以上に『旅の印象』は成功をおさめた。それをともに喜んでデュマに感謝すべき人が、怒って彼を恨むというのは、デュマには理解しがたいことであり、忘れがたいできごととして記憶に残ったのであろう。

旅行記の虚構

スイス旅行のあいだ、デュマは手帳にメモを書きつづけていた。彼が実際に見たり聞いたり経験したこと、つまり旅での事実を手帳に簡単に記していたのである。『旅の印象』のなかでも、その手帳について何度かふれている。たとえば、シャモニーでモンブラン初登頂者のジャック・バルマと話したときには、「わたしは手帳と鉛筆を手にとって、書きつける準備をした」²⁷とある。スイスの宿では夜に入浴するのが楽しみで、その日にあったことを浴槽で手帳にメモしている、とも書いてもいる²⁸。

²⁶ *Ibid.*

²⁷ Alexandre Dumas, *Voyage en Suisse, op. cit.*, p. 88.

²⁸ *Ibid.*, p. 393.

だが、何冊もあった手帳のほとんどは失われてしまった。1冊だけが残されており、まさにシャモニー滞在の翌日から帰国前夜のトリノまでのことが記されている。その手帳によって、実際の旅程の最終部分を知ることができる。デュマは、シャモニー滞在を終えたあと、マルティニを経由して、シンプロン峠を越え、イタリアに入り、ミラノやさまざまな町をたずねたのち、トリノへ行った。手帳の記述はそこで終わっているが、そのあとパリへの帰途について知られている²⁹。

この旅程は、『旅の印象』で語られる道筋とは全く異なっている。『旅の印象』では、シャモニーを出発したあと、シンプロン峠ではなくサン＝ベルナル峠を越えて、エクス＝レ＝バン温泉に行き、そのあとに長いスイス一周旅行に出たことになっている。つまりマルティニでの事件は、デュマがアルプス旅行をはじめたまもないころとされているのである。実際には、マルティニをおとずれたのは、3か月間の旅のなかでも後半の2か月めごろのことだったのであるが。

19世紀の旅行記では、内容をおもしろくするために多少の虚構を交えることはよくある。その典型がスタンダールであろう。彼は、1816年12月から1817年春までのイタリア周遊旅行を題材として、1817年秋に『イタリア紀行』を出し、1827年には『イタリア旅日記』を出版している。実際の旅は、ミラノを出発してミラノに帰るという3か月間の旅であったが、『イタリア紀行』ではベルリンを出発してイタリアをまわり、11か月後にフランクフルトに帰った旅になっている。そして『イタリア旅日記』では、ベルリンを出発して10か月ほど旅をつづけ、ローマに3か月近く滞在しているところで旅日記は中断されている³⁰。旅路が異なっているだけでなく、訪れてもいない町に行ったり書いたり、会ってもいない人に会ったと書いたり、旅行記というよりはほとんど小説に近い作品になっていると言ってよいであろう。

デュマもスタンダール以上に、実際の旅と旅行記の旅路とを大きく変えているのであるが、結局、マルティニで起こったできごとの事実とは何だったのであるか。残された手帳を見ると、デュマは1832年9月30日の朝にシャモニーを発ったあと、森のなかの道や断崖絶壁の脇や落ちそうな大岩の横

²⁹ 1832年10月9日にトリノへ着き、20日にパリへ帰り着いたことが明らかになっている。Dominique Frémy et Claude Schopp, « Quid d'Alexandre Dumas. 1. Biographie d'Alexandre Dumas », dans Alexandre Dumas, *Mes mémoires, op. cit.*, p. 1204-1206.

³⁰ Stendhal, « Rome, Naples et Florence en 1817 », *Voyages en Italie*, textes établis, présentés et annotés par Victor Del Litto, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1992 ; « Rome, Naples et Florence (1826) », *ibid.*

を歩き、マルティニに向かったことが書かれている。マルティニのできごとについては何の記述もないが、「マルティニ」という言葉は2度しるされている。

マルティニからリッドまでの街道はびんと張った糸のようだ。リッドのすこし手前のところにディアブルレの山。地面が盛り上がった様子をはっきりとわかる。10月1日9時にマルティニを出発³¹。

リッドは、マルティニから10キロメートルほど先にある町である。シャモニー側の山からマルティニのほうへ下ってゆくとときに峠から町が一望でき、マルティニからリッドの町まで街道がまっすぐに伸びているのが見える。そのことを言っているのであろう。街道を目で追ってゆくと、左手にディアブルレ山がそびえ立っているのも見える。

峠を下ったあと、マルティニの町に着いたはずであるが、何も書かれておらず、翌朝に出発したことだけが記されている。したがって、この日の夜に「熊のステーキ」事件が起こったとは考えにくい。また、シャモニーへ行く前夜に事件が起こっていたとすれば、ふたたびおなじマルティニの宿にもどってきたときに何かひとことあったはずである。だがそんな気配もない。この手帳の口調を見るかぎり、やはりマルティニの宿では「熊のステーキ」事件に類することは起こっていなかったようである。そもそもデュマ自身が『わが回想』のなかで、熊のステーキを食べたというのは「演出」にすぎないと語っていたのだから。

それでは、猟師あるいは農夫が熊に殺されたという事件については、事実はどうだったのか。手帳では、マルティニからの出発のあとは次のように続けられている。

10月1日9時にマルティニを出発。シャレの村で、ひとりの農夫が熊を待ち伏せて殺した。トゥルトマンの町。滝——教会の前にいたとき、音がするので行ってみると、切り立った岩に囲まれた小さな谷の奥にあった³²。

シャレ村は、マルティニから街道を40キロメートルほど行ったところであり、トゥルトマンはさらに20キロメートル先である。デュマは、シャレ村を

³¹ Alexandre Dumas, « Album de voyage », *Voyage en Suisse*, op. cit., p. 571.

³² *Ibid.*

通ったとき、1頭の熊が仕留められたことを聞いたが、足を止めることなくそのあと道が続けてトゥルトマンの町へ向かった。

それだけのことである。マルティニから40キロメートルも離れた村で1頭の熊が殺された。それだけの事実から、デュマはマルティニでの「熊のステーキ」の話を作りあげたのである。しかも、熊に食べられてしまったときれたギヨーム・モナとは、デュマが生まれ育った北フランスのヴィレル＝コレ村の森林監視官の名だったという³³。デュマは子ども時代に見知っていた人の名前を借りたのだった。驚くべき想像力と創造力である。つまりデュマの『旅の印象』は、スタンダールの『イタリア紀行』や『イタリア旅日記』とおなじく、もはや旅行記ではなく小説になっていたと言うべきであろう。

旅行記から小説へ

旅行記とは、作者が旅で見聞したり経験したことを偽りなく書きとめたものだと読者は考えがちである。旅行記に書かれていることは事実である、と。それゆえに「熊のステーキ」の問題は生じたのだった。マルティニの宿の主人は、旅行記のなかに登場させられたことが不運だったのである。宿の主人だけでなく、『旅の印象』に登場させられた何人もが、書かれたことは嘘だと苦情を言うことになったのである。

『旅の印象』は、小さな事件だけでなく歴史的事実さえ歪曲してしまった。モンブランの初登頂にかんしてである。初登頂は、1786年に医師ミシェル・パカールとガイドのジャック・バルマによってなされた。より正確に言うと、パカールが最初に登頂し、その数分後にバルマが着いたというのが事実であった。ところがデュマは、シャモニーに滞在中に、当時まだ存命していたバルマに何度も会って詳しく話を聞き、バルマの冒険談をおもしろく劇的に書きあげて、『旅の印象』で発表したのである。まず最初にバルマが登頂し、そのあと、疲れて動けなくなっていたパカールをバルマが引っぱりあげてやったのだ、と³⁴。デュマの書いたことは事実だと信じられた。モンブラン初登頂の栄誉からパカールの名前は消されて、シャモニーの町にはバルマとソ

³³ Cf. Alain Chardonnes, « Présentation du texte », dans Alexandre Dumas, *Impressions de voyage : en Suisse*, texte établi et présenté par Alain Chardonnes, Paris, L'Harmattan, t. I, 2015, p. 14.

³⁴ Alexandre Dumas, « Jacques Balmat, dit Mont-Blanc », *Voyage en Suisse*, op. cit., p. 95.

シュールの銅像が建てられた。パカールの名譽が回復されるのは、20世紀に入ってからのものである。

この「モンブラン初登頂」の誤伝も「熊のステーキ」の騒動も、旅行記は真実であるという読者の思いこみから生じたことであつた。もし『旅の印象』が「小説」と銘打たれていたなら、このようなことにはならなかつただろう。

デュマは、アルプス旅行から10年あまり過ぎた1844年に『モンテ・クリスト伯』を書きはじめた。これはそれより数十年前に実際に起こつた「ピエール・ピコー事件」を小説化したものである。スタンダールもおなじように、『イタリア旅日記』の数年後の1830年に『赤と黒』を発表した。これも数年前に実際に起こつた「ベルテ事件」を小説化したものである。デュマとスタンダールが、小説を手がける前の時期に、それぞれ虚構にみちた旅行記を発表していたことは偶然ではないだろう。ふたりとも、旅行記を書くことによって、事実を虚構化して小説に作りあげてゆく手法を学んだのではないだろうか。つまり、デュマもスタンダールも、旅行記を書くことによって、小説家として目覚めたのである。

1932年9月28日、デュマはマルティニを出発してシャモニーに向つた。苦しい思いをして山々を越え、やっとシャモニーの町を見おろすバルム峠までたどり着き、休憩をした。ひとごちつについて、まわりの景色をながめた。いくえにも重なつて続く高い峰々、いくつもの氷河、そして山々の上には「北極海の氷塊のうえに寝そべる白熊」のような「ヨーロッパの山々の王者」のモンブラン。デュマは、「1時間のあいだ、茫然としてその絵のような光景をながめていた³⁵」という。デュマもまた、多くの観光客とおなじようにモンブランとそのまわりの景色に見とれていたのだ。その1時間のあいだ、彼は何を考えていたのだろうか。他の旅行者とおなじように、この風景をいかに表現すべきかと考えていたのだろうか。

時間が経ち、寒くなつてきたので、急いで峠を下りた。シャモニーに着いたときには夜になつていた。疲れきつたデュマが宿でしたことは、三つだった。まず入浴すること、つぎに夕食をとること。そしてジャック・バルマを翌日の夕食に招待したいという手紙をバルマの家に届けさせることだった。宛名には「モンブラン王、ジャック・バルマ様」と書いた³⁶。

³⁵ Alexandre Dumas, « Le col de Balme », *Voyage en Suisse*, op. cit., p. 82.

³⁶ *Ibid.*, p. 83.

シャモニーに着くまえの峠でモンブランをながめながら、1時間のあいだデュマが考えていたのは、『旅の印象』でいかに山の風景を描き出すかということではなく、モンブラン初登頂の話をどのように作りあげるかということだったのではないか。そのためにはどうしてもジャック・バルマに会わなければならなかった。そのように考えたとき、『旅の印象』は、旅行記ではなく小説のほうへと近づいていったのだろう。デュマは小説家になりつつあったのである。